
消滅士

相沢たかし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消滅士

【Nコード】

N30521

【作者名】

相沢たかし

【あらすじ】

恋した人を――罪と罰に憑かれた心が、異世界で目を覚ます――。

突如として異世界…ムンドゥスに跳ばされた主人公…片岡真^{かたおか・しん}。彼にはムンドゥスを浄化する能力があるという。

思うように発現できない力。

刻々と迫る滅びの未来。

真は世界を救えるか！？

――自身の心の傷仲間と共に乗り越える再生と成長の物語――

プロローグ（前書き）

本小説は弊社サイト「相沢印刷所」にて連載中のものを書き直して投稿しているものです。弊社サイト版は修正せずに残しておこうかと考えております。

なお、最新話は上記弊社サイトにて連載中です。
コンスタントに投稿するつもりではおりますが、よろしく願いいたします。

相沢たかし

プロローグ

プロローグ　バニッシャ、パニッシャ

遠くで金属のぶつかる音が聞こえる。

あいつらが戦ってくれている。

軽い衝撃。

肩口に痛みを感じた。

「シン！」

誰かが俺を呼んだ。

仲間が敵の攻撃を防ぎきれなかったらしい。

傷口を無視した。

俺は目を閉じて、対象に集中する。

怒り、悲しみ、無念……。

負の感情。

源を、探す。

対象の意識を奥へ奥へと遡り、俺はやっと”それ”を見つけた。

両手の震えを抑制して、その赤黒い塊に触れる。

捧げ持った”それ”は、金色に霧散して、消えた。

自我の闇に寄生し、魔に変える存在、通称”世界の歪み”。

これを消滅させることが、俺の使命だそうだ。

相手と意識を共有し、消滅術と呼ばれる術で”世界の歪み”を消

す――御祓いのようなものだ。

現実から遠く離れた異世界、ムンドウス。

生き物が次々と歪みに侵食されたこの世界は、危機に瀕していた。

この世界で初めて目覚めたとき、俺は、自分に素養があると告げられた。

俺の、救世主——つまり消滅士としての戦いはその日から始まった。

プロローグ 了

第一話〜目覚めの時〜（前書き）

本小説は弊社サイト「相沢印刷所」にて連載中のものを書き直して投稿しているものです。弊社サイト版は修正せずに残しておこうかと考えております。

なお、最新話は上記弊社サイトにて連載中です。
コンスタントに投稿するつもりではおりますが、よろしく願いいたします。

相沢たかし

第一話　目覚めの時

晴れていた。

日は既に高く、暖気された大気が緩やかに移っていた。長い冬が終わった。

異変。

大きな木の下に雪が落ちた。陽光を得て、金色に輝く。天空からまっすぐに、羽毛のようにゆっくりと、慈雨が降りた。

光りは地に染まず、やがては人の体を成す。

男、というには幼い。男の子、と呼称するには無理がある――そんな少年。

滑らかな、黒い髪。

後ろは首が見えるくらい。サイドは耳に少し掛かって、前髪は一部で眉を越すだろう。

背中を木に預けて目を閉じている。体は完全に弛緩しているのに、眉根を寄せたままだった。

不意に、目じりから流れが生まれた。細く頬を伝って、服の中へ沈む。

……同じ空の下。

一人の女が宝珠を見つめていた。

純白の塔の屋上。女の傍には従者と思しき少女が控えている。

女の瞳が広がって――叫んだ。

「来た――！」

第一話　目覚めの時

最初に思ったのは、「なんだ、もう朝か」だった。さつき眠ったはずなのに太陽が目にはさしている。

爽やかな空気が、心地よい。

目をしばたかせて、大きく伸びを一つ。酸素が脳に供給され、頭がはつきりしてくる。

――が、辺りを見渡して心臓が止まりそうになった。

ここは自分の部屋ではない。いや、建物の中ですらなかった。森の中で木に体を預けて寝ていたようだ。太陽はまぶしく、緑でいっぱい、風が木々をゆっくり揺らしている。自分の着ている物は紺色のスウェットスーツで、昨日寝たときのままだ。本来ならこれから準備をして高校へ行くのだが、今はそれどころではなかった。

昨日、確かに自分の部屋で寝たはずだ。記憶の糸を手繰っても何も出てこない。周囲には見たこともない木々が茂っていた。日本ではない、ということだろうか？

時計を持っていないから日時もわからない。全身に鳥肌が立ち、益体もない仮定がいくつか浮かんで、消えた。

一つだけ確かなことは、今、自分が生きている、ということだ。ここはどこだか知らないが、簡単に死ぬつもりもない。ゆっくりと立ち上がる。

何かの雑音が聞こえた。ラジオの周波数を合わせているような、ひずんだ音。とうとう耳まで壊れたのか、と思う。

「わたしの声が聞こえますか？ この世界へようこそ、片岡真（かたおか 眞しん）」

声が、響いた。

「誰だ！」

叫んで、振り向く。

目を凝らし、耳を澄ましたけれど、木立が続くばかりで何者の気配もなかった。ただ風だけが、緑の間を縫っていく。ゆっくりと額

に水滴が湧いて、落ちていった。何の異常もない、という自分の知覚が、底知れぬほど恐ろしい。

幻聴でない、自分のことを知っている声。こちらは、相手を知らない。

四肢の力を抜く。もう一度、探す。来るなら、来い。

”驚かせてごめんなさい。わたしはカッサンドラ。預言者です。数日前にあなたがこの世界に現れるとわかりました。だから、あなたの名前を知っているのよ。今は、あなたの心に直接話しかけています”

女の声だ。少し、高圧的に聞こえる。頭がよく、自分でもそれを理解していて、隠そうとしていない。

しかし、よくよく聞けば音を聞いているわけでもなさそうだった。妙にかすれた、荒い声をしている。これが、心に直接話しかけている、ということか？

「預言者？　ここは……、なぜ、俺はこんな所にいる！」

血の気を失っていた。

女の言葉から察するに、ここはもといた世界ではない。

”落ち着きなさい。大丈夫、あなたは元の世界に帰れるわ。ただ、残念ながら、それを説明してあげられるだけの時間がないの。あなたと話してられる間に伝えなければならぬことがあるから”

カッサンドラは早口続けた。徐々に、ノイズが混じり始める。

”わたしが行くまで生きてて欲しい”

声が、荒い。

「どういう意味だ？」

頭まで木に預けた。後頭部の感覚が、目の前まで突き抜けていった。

”あなたの現れる場所が予想とずれてしまった。そこには……魔獣がいる。彼らは危険な生き物で、そして、あなたは彼らの天敵。きっと、あなたを殺そうとする”

「俺が天敵だって？」

” いえ、正確には……あなたは、彼らの天敵になりうるの。あなたの消滅士としての潜在能力を、彼らは感じているに違いないわ”

終わりの方はほとんど聞こえていなかった。初めて買ってもらった携帯みたいだ、と思い出す。

” ごめんなさい、もうだめみたい。いい？ 既に我々はあなたの位置

をつかんでいます。必ず助けに行くから、それまで生き残ッ……”

音が一段酷くなり、消えた。眼を瞑って、大きく息をつく。背中がじつとりと濡れて、気分が悪かった。

静寂。

『ここは、日本ではない。そして、自分の命が危険にさらされている』

彼女の言ったのはそういうことだ。

空気がゆつたりと流れて、頬を撫でる。緑の薫りがぬけていく。

自分はもう死んでいるのではないか、と思った。あの世の存在なんて信じちゃいないけど、確かめた者は今までいない。

木に手を掛け、立ち上がる。

自分はまだ、生きていたいのだろうか？

木漏れ日が、揺れている。

頭が重く、考えもまとまらなかった。何をするでもなく、立っていた。

木々で仕切られた小窓から、空が覗いている。

雲などなく、鳥などなく。

瞳を閉じて、落ち着こうとして……気付いた。

背後から、空気を切り裂く音がする。自然に両足の力が抜けて、体を沈めていた。

頭上を何かが通り過ぎる。この世界の、見えないどこかから、獣のうなり声が、今度ははっきりと聞こえてきた。

体が、緊張する。

どうやらまだ、生きていたいようだった。

＞第一話了＜

第二話く本能く（前書き）

本小説は弊社サイト「相沢印刷所」にて連載中のものを書き直して投稿しているものです。弊社サイト版は修正せずに残しておこうかと考えております。

なお、最新話は上記弊社サイトにて連載中です。
コンスタントに投稿するつもりではおりますが、よろしく願いいたします。

相沢たかし

第二話く本能く

第二話く本能く

体勢を立て直しながら、致命的な一撃を回避できた幸運に感謝していた。パニックに陥ろうとする頭を懸命に押さえつける。

敵の消えた方向に目を向けた。正面の木立からうなり声が聞こえる。気配に気を配りながら、慎重に後退した。

死角が多すぎた。

もう一度、気配を消されたら、さっきよりも近くから攻撃されたら、避けきる自信はない。

頭上を通り過ぎた影は大きい。想像するまでもなく、当たれば生きてはいられないことが明白だった。

すぐにでも駆け出したいのをこらえて、逃げ出すための隙を懸命に探していた。感覚の網を張り巡らして、相手の一挙一動を感じ取ろうとした。ここには、死ぬ。

うなり声は続き、時間が過ぎた。小鳥が飛んできて枝に止まった。首を右、左と小刻みに動かす。何も見つけられなかったのか、体の向きを変えて、ぱっと飛び立った。

気配が消える。俺も同時に走り出した。

立ち止まっていたは何をされるかわかったものではない。森の木々を不規則に駆けて、生存の可能性を探す。

後ろに敵を感じない。次の瞬間には倒されているかもしれない。振り向きたくなるのを我慢して走り続ける。

眼前に広がる映像が、だんだん、ゆっくりと鈍ってきた。

もう、どこをどう進んでいるのかすら、不明だ。体中に満ちた緊張で頭がどうにかなりそうで、実際、なんの脈絡もないことが脳裏を走った。

——おかしい。

随分と長い間、走り続けているように感じる。

行くべき方向に導かれているような気分なのはなぜだ？

既に、死んでしまっている？

違う。

走り出す前から、その存在を感じていた。

その意思。大笑いしたくなるくらい独善的な。

……俺は、死にたくない。

生き続ける今が決してハッピーとは言えない状態なのに。

あるいは、生きることが許されているかすらもわからないのに。

人間は人間として生まれてくるのではない。生まれてから 人間へと分化していくのだ、と思う。

生まれた瞬間、我々はきつと まだ動物なのだ。感覚の鈍化という代償を支払って、動物から人間へと変わっていく、野生の本能に知性の仮面を被せて。

深刻な死の予感。

たったそれだけのことで、俺は、無意識に仮面を剥ぎ取ったのに違いない。

それ以外に、説明がつかない。

俺は、考えていたよりもずっと見晴らしの悪い場所で戦った。

相手をよく見るために、完全に開けた場所を望んでいた。しかし、戦った場所はそんな環境ではなく、そしてそれ故に、俺は生き残れた。木々のない所というのは、視界が良好になる代わりに、相手がそのスピードをフルに生かしてしまう。そんな条件では俺に勝ち目はなかっただろう。

自分がどこにいるかもわからず、勘を頼りに闇雲に走った。けれど、剥き出しになった本能は木を読み、土を読み、そうして森を読んで、自分が生き残れる場所を探し当てたのだ。相手を視認しつつ、

木々を盾にして戦える、その場所を。

同時に、その野生は俺の中の別の力をも引き出しつつあった。

襲撃者は、俺を背中から飛び越して、いきなり目の前に現れた。後方に飛び退って、距離をとる。

見た。

姿を言えば狼に近いが、大きさが半端ではない。遠くから見れば熊だと認識するだろう。目の前にいても、そう、思いたくなる。

爪と牙は濡れたように輝いている。白銀の毛皮が震えている。赤く染まったその目には、狂気さえ。

狼は姿勢を低くし、こちらの動きを伺っていた。強烈な敵意は俺の足を竦ませ、心を萎えさせる。鋭い眼光。

体が竦んでいることを抜きにしても、逃げられないと悟った。狼相手に人間が競争で勝てるわけではない。今まで走っている俺に攻撃しなかったのは、俺が避けられないところまで距離を詰められなかったからだ。最初の奇襲に失敗したことで動揺してくれたのだと思う。もう一度逃げ出せば、今度こそ終わってしまう。

では、戦えと？

分が悪い。

ヤツが一度目の攻撃をしくじってくれたのは単なる油断。獣にとって素手の人間というのは、多くの場合ソフトターゲットなのだから。一度目の失敗を経た今、あの狼は、確実に仕留められる方法・タイミング・距離で仕掛けてくる。

一方、こちらは寝起きの上に、見知らぬ世界に放り込まれて混乱している。おまけに、素手だ。場所を移動したものの、依然不利な状況に変わりはない。

敵はじりじりと距離を詰めてくる。冷や汗が額を伝った。ぎりぎりの状況でかろうじて頭を働かせ、そして結論した。

後の先を取る。

相手の初撃を処理できる保証がないために、通常は先制攻撃が有利だ。けれど、それは武器を持っているときの話し。素手の俺が相手に致命傷を負わせられる距離は、敵のそれをはるかに下回っている。迂闊に飛び込めば自分の拳が届く前に食い殺されてしまうだろう。それよりは、ヤツに攻撃させ、向こうからこっちの間合いに入ってもらった方がいい。それが、後の先。究極のカウンタ。

俺は、更に後退した。一際太い木が背になるように構える。これで少なくとも真後ろから攻撃されることはない。少しでも相手の速さに備える必要がある。

狼をまっすぐ見据えた。一步、二歩、確かめるように近づいてくる。冷静に、俺を追い詰める。聞こえるはずのないその足音までが、耳に届きそうだった。

そして、その時はやってきた。

地面を蹴る音がして、視界から消えた。

次の一瞬にはまた何かを蹴る音が聞こえる。その音自体も、既に生き物の発するものではない。消えたのだから、死角に入ったということ。自分が馬だったら、全てが見えたのに、と考えた。

目を閉じた。空気の流れを感じとる――そんなものがわかるのかどうかは、問題ではない。そうしなければならぬ、と誰かが囁いていた。

といって、目の前から消えるような敵を相手して、完全にかわす望みはないだろう。自分の直感を信じ、受け流すほかなさそうだった。もちろん、こちらもただではすまないが、しかし、まともにかわそうと思えば、どうしてもよけ幅が大きくなり反撃のチャンスを逸する。いずれは直撃を受け、やられてしまう。

感覚の発火に、体捌きを呼応させた。

右足を軸にして左半身を回転させる。左肩に何かが当たったが、かえって勢いがついた。

体の左側を、すり抜けていく狼。

目を開け、左足を踏み込み、流れに肉体をのせて、側頭部に右拳を叩き込んだ。

狼が空中を泳ぐ。そのまま、背後にあった巨木に叩きつけられて動かなくなった。俺は俺で、木にもたれかかるようにして座りこむ。全身が汗だくで、力も入らない。荒い息を何とか整えようとした。自分の死をここまで間近に感じたことなど、今までなかった。平和な現実世界では一生感じないだろう、その感覚。

しかし、どうか、生きのびた。

知らず、体が震える。自分の命がまだ脈を刻んでいることに手応えを感じる。

乱れた息が伝える不快感と、手にした生の充足。そんな風に矛盾した信号を感じながら、しばらくの間、俺は自分の命をかみ締めていた。

>第二話了<

第三話くフラッシュ・バックく（前書き）

本小説は弊社サイト「相沢印刷所」にて連載中のものを書き直して投稿しているものです。弊社サイト版は修正せずに残しておこうかと考えております。

なお、最新話は上記弊社サイトにて連載中です。
コンスタントに投稿するつもりではおりますが、よろしく願いいたします。

相沢たかし

第三話くフラッシュ・バックく

第三話くフラッシュ・バックく

魔獣。

喘ぎながらそれを見、不思議に穏やかだった。危うさを感じなかった。自分を殺そうとした存在に見とれていて、恐ろしかった。またひとつ、壊れただろうか。

確かめなければならなかった。つまり、その生死。

右手にはまだ、ずしりと手応えが残っている。けれど、「死んだふりだったら」という思いが――可能性は低いとわかっている――近づくことをためらわせた。用心深く何度も進退を繰り返し、そばに寄った。

美しい、銀の皮。流星に見える。

反応はない。

いつでも飛びすされるよう構えながら、じっと様子を窺った。

微動もない。

静かに長く息を吐いて、もと居た場所に戻る。腰を下ろした。一息ついたら近くに隠れる。そして、じっとしていよう。

狼は、群れ。

知識として、頭の中にそれはあった。このままここに居たら、囲まれて死ぬだろうか？ 何もかも、変わりすぎた。周囲の光景にも、自分の体内感覚にも、現実味が一切ない。

疲れていた。

左の肩口に血がにじんでいる。深手ではないが、気持ちのよいものでもない。生きるために逃げ出したい自分と全てを投げ打ちたい己が頭の中で踊った。いつそ今すぐ殺してほしいとさえ。戦いの緊

張が薄れて、冷やかさが胸に満ちた。

視界が歪んだ。

背中の木に頭をあずけて目を閉じる。

強烈な吐き気を催して、思わず手を口に当てようとして。

覚悟した。

全身が感覚を失っていく中、「何度経験しても慣れないものだ」
と黙っていた。

吐き気の原因を知っている。

これから始まる幻をどうすることもできないとも、わかっていた。
閉じた目の暗闇が終わり、別な映像が流れ始める。

忘れたいもの。

でも、忘れてはいけないもの。あるいは、忘れたくないもの、だ
ろうか。

光景は夏の終わり。夕方の弓道場へと移っていく。

かつての自分。遠い映像がそこにはあった。

自分を見ている自分がいて、同時にいくつかの視界が広がった。

弓を引く片岡真の視点。それとは別にその彼を見ている自分の視点。

「止めてくれ！」と叫んだだろうか。ヴィジョンを止めようとい
う努力はしただろうか。それすらもわからない。

ただ涙が落ちる。まだ泣けるのだな、と思った。

晩夏。

遅い夕暮れで、道場の矢道（注1）には西から日が当たっている。
幻の片岡真は、射場の東の端で的に集中し、黙々と弓を引いていた。

「あの人」が、見ている。それだけだ。気分の高揚は、そんな単
純な理由。

……その場面を迎える。

弓を引く片岡真。自信に満ちて、修練の成果を表そうとしている。俺は目を閉じこの思い出から逃れようとするが、もとよりまぶたは落ちており目を背けることもかなわない。

——自分のはなった矢が、飛ぶ。周囲は真っ暗になって、自分と矢とのだけが見えた。

矢が、ゆっくりに近づく。狙い通り、標的の真ん中に進んでいく。

なんて、綺麗な、軌跡。

けれど当たる直前、人が倒れ込む。それが誰かを知っている。

ゆっくりと。

俺をなぶって。

矢はじわじわ近づいた。

皮を破り、骨を砕き、更に映像は進む。俺に全てを見せつけて、ゆっくり、ゆっくり進んでいく。

彼女は倒れこんだ。この世の全てを焼きつけようと、その目は一杯に広がっていた。

目を開けた。眠っていたわけではない。

一年ほど前、俺は人の命を奪った。それは、誰のせいでもなかった。多くの悲惨な事故がそうであるように、数々の偶然が重なってそうってしまった。

俺は、何かを壊す、傷つける、ということができなくなった。一時は「はさみで物を切る」ことなど望外だったし、ごく初期の段階では物を食えることさえかなわなかった。そういう行為のたびに、今のようものが繰り返された。一日一日やり過ぎす日々が続いて、記憶は薄れていった。それでもまだ、数十秒の幻が海馬の奥にこび

りついている。

魔獣を殺したのは仕方なかったこと。だがその一方で――何とも甘いが――倒したくはなかったとも思っていた。

ぐったりと動かない狼を眺めている。眺めていて……凍りついた。白銀の塊が、倒したはずのそれが、動いた。

＞第三話了＜

注1：矢道…弓道場の射場からの間の部分

第四話く念話く（前書き）

本小説は弊社サイト「相沢印刷所」にて連載中のものを書き直して投稿しているものです。弊社サイト版は修正せずに残しておこうかと考えております。

なお、最新話は上記弊社サイトにて連載中です。
コンスタントに投稿するつもりではおりますが、よろしく願いいたします。

相沢たかし

第四話〈念話〉

第四話〈念話〉

殺気のない狼に困惑した。俺を殺そうとした「魔獣」が、正面でじっとしている……。

“おわかりでないのですか？”

頭の中で声が響いた。

女性。

丁寧だ。カッサンドラとはまるで違う。

カッサンドラと話したときと同じ感じがした。つまり、かけられた言葉が音ではなく、指向性を持つ思念・意識——そういったものに感じられた。

そして、その相手は……。

“その通り。わたくしでございます”

狼は起き上がり、座してこちらを見ていた。

やはり、自分はこの巨狼に危険を感じていないようだ。自然と腰が落ちて、木にもたれた。立っているのがやっとだった。

狼の声は、カッサンドラのよりも澄んでいるのに気づく。あの時のように、雑音が混じったり、声が歪んだり、していない。近くで話しているからか、それとも、心を読まれているのか。

落ち着く間もなく、次の念が続く。

“ええ、読んでいます。正確にはあなたがわたくしに流し込んでいると言いましうか。あなたは消滅士様ですね？ でなければ、こんなまねはできません”

言い回しが遠い。しかも、またしても「消滅士」という名詞が出てきた。正体不明のこの「役職」に俺は振り回されている。

カッサンドラの言うことが正しいのなら「この狼は魔獣で、それ

を俺が救った」ということなのか。なら、自分は何をやった？
そう、ただ殴っただけ。百歩譲って、救ったところまでは納得するにしても、思考を流し込む能力があるとは聞いてない。

俺は、ただの高校生だったはずだ。そういう存在として自分を認識し、生きてきて……、この世界ではそうではない。今までの生活が幻だったとも、考えられる。

いままでの全てが、この森で眠っていた俺の見た夢だったとしたら？

目の前の狼は、俺のことを、いや、少なくとも消滅士のことを知っている。俺は、彼女に救いを求めた。俺は、誰だ？

見れば、不思議そうな視線を彼女は俺に向けている。念が、流れる。

“あなたは本当に消滅士様なのでしょうか？ 先ほどからご自分の思考をそっくりわたしに流れ込ませておいですが。何かしゃべっては頂けませんか？ せっかく憧れの消滅士様にお会いできたのですから”

と、何かを期待して、目をきらきら輝かせている。声の調子もガラッと変わって上ずったものになっていた。寧猛さは既に失せたが、血走ったあの目を見た俺としては素直に可愛いとは思えなかった。やはり図体はでかいのだし、そのなりで愛嬌を振りまかれても困ってしまう。

気色悪い狼はさておき、結論として、消滅士というのは自分の意思を選択的に相手に伝えられるらしい。察するに、言いたいことを心の中で強く思えばいいようだ。狼の返答は俺の強い感情を感じ取ったためだろう。気づいてしまえばどうということはない。

目の前の狼は——恐ろしいことに——まだ目を輝かせている。不意に、眼光が鋭くなった。

“背中に乗ってください！”

声が張りつめる。俺の方に一瞬で近づく。

何のことかわからない。

“早く！ 囲まれますよ！！”

気配はない。森は、相変わらず静かだ。しかし、狼は何かを感じている。両耳を、ぴくっぴくっと動かす。

“まだ、お気づきでないようですね。申し訳ありませんが……失礼します！！”

発声の余韻も消えきらないうちに、目の前から消えた。ステップして背後に回りこんだのだろうが、襲われたときより数段速い。「空気を感ずる」どころではなかった。今度は全く反応できない。

背中を跳ね上げられ、斜め上空に体が吹き飛ばされる。飛びながら体は回転し、地面が見えていた。状況を把握する時間を与えられないまま、更に視界が銀色に染まる。何か、暖かく滑らかなものに受け止められた。

“ちゃんとつかまって下さい！！”

狼が一喝。

その声に遅れて、背中に載せられたことがようやくわかった。そのまま彼女は走り出す。必死にしがみつきながら、何かを追ってきているのを知覚した。それも一匹ではない。

狼が速さを上げる。体にまとわりつく風が一層激しさを増し、俺を引き剥がそうとする。大気との攻防で、どうやら味方らしいこの狼の名をまだ聞いていないことに、俺は気づいた。

“名前を聞いても？”

念じる。

“わたくしは……レイとでもお呼びください。通り名です。そちらの世界にも同音同意の言葉があると聞いておりますが”

「Ray」——光か。

“撒きますよ！”

レイが言った。加速のために、ぐんっと後ろに引っ張られる。しがみついた手に、力を込め直す。

群れだ！

5、6匹がかたまつてこちらに向かつてくる。しかも、徐々に数を増している。あちこちからどんどん集まつて、迫った。レイが、同族から何故俺をかばうのかはわからなかったが、今はしがみついているしかなかった。

徐々に、手が痺れる。彼女の体は滑らかで掴むところがない。腕や指で痙攣が始まつているのはとうに知っていた。

“ほう、意外にしつこい。少々加減が過ぎましたね”小さく舌なめずりを、一つ。“消滅士様。申しわけありませんが、もう一度加速します。いけそうですか？”

レイが発する。危機の渦中なのだが、冷静だった。思念で会話ができるのはありがたい。風切り音が酷く、声は通じない。

続ける。

“無理なら、わたくしが迎え撃ちます。ご用命とあらば、可及的速やかに処理いたしましたよう”

その自信は、どこからくる？ 追手はさらに増えていた。逃げられるのなら、それがいい。

告げた。

“同族で争うこともないでしょう。加速をお願いします”
両手足に力を込め、備える。

“承知。お心遣いありがとうございます”

俺を氣遣つてか、ゆっくり、しかし確実にレイは加速していった。このスピードで振り落とされたら、ただではすまない。もう、目を開けていられなかった。追手の氣配が遠のいていく。きっちり、振り切ったらしい。

レイにもそれがわかったようで、少しずつ減速した。俺も力を緩める。首皮一枚、つながったようだ。腕にはもう、感覚がなくなっていた。

その後、レイは一旦川に飛び込み、俺と自分の臭いを隠した。川から随分進んだところで、茂みの中へ、彼女は消えた。

しばらくして、何を調べてきたか、

“こちらです”

と、茂みを掻き分けた。

人一人、やっと通れるくらいの穴。奥が深く、何も見えない。闇闇に若干の不安を感じながら、俺は四つんばいになって中へ入っていった。

＞第四話了＜

第五話〜忠誠〜（前書き）

本小説は弊社サイト「相沢印刷所」にて連載中のものを書き直して投稿しているものです。弊社サイト版は修正せずに残しておこうかと考えております。

なお、最新話は上記弊社サイトにて連載中です。
コンスタントに投稿するつもりではおりますが、よろしく願いいたします。

相沢たかし

第五話　忠誠

圧迫を知っている。

裏切りを、搾取を、知っている。

なおシンは、レイに従った。知れない闇へ、進んだ。なかば流されるようではあったが、それにしても……。

シンはまだ知らない。

念を通じるということ。それは、相手の心を感じ、読み取る行為。敵対の意思を持たない、レイ。

消滅士としての適性を、シンは、明白に発露しつつあった。

第五話　忠誠

四つんばいになって、穴の中へ入っていった。遅れてレイが続いた。

入り口からわずかに光を感じるが――暗い。手をついた地面は湿っていて、空気はひやりと冷たかった。天井から滴っているのか、時折水滴の落ちる音が聞こえる。

少しずつ暗さに目が慣れた。外からは完全な闇だったが、どこか天井に明り取りがあるようで、意外に見通しが利く。入り口と違い中は天井も高く、広かった。

レイは、暗がりで見えにくくしていた俺の隣をすり抜けて、奥へ消えていった。

ゆっくり、立ち上がろうとした。見えるようで見えない。岩壁に頭をぶつけたくなかった。

“灯りをつけませんか？”

声がした。

闇からぬっと顔を出し、どこから見つけてきたか、レイは、俺の足元に火打石を転がしてきた。

“煙は……、出ませんか？”

灯りをつけるのはいが追っ手に見つかりたくはない。包囲されでもしたらと思って ぞっとした。

“この中で燃やしてください。換気は、完璧です”

レイが言った。前足でそつと一所を指し示す。見れば、何か電子レンジぐらいの箱が岩に埋め込まれている。鉄製だろうか。錆びついたふたを開けると煤の臭いが鼻をついた。ふたにはガラスがはめ込まれていた。であれば、煙は多分、全く異なる場所から出ていくのだろう。

レイは火打石の他に様々な燃料も啜えてきたが、着火の方式がひどくプリミティブで苦労した。狼の助言を経て微弱な火力を閉じ込め、幾ばくかの光が広がった。

“わたくしは灯りなんてなくても見えるのですが、消滅士様は落ちて着かないでしょう？”

四肢で立ち、こちらを見ていた。白銀の巨体が炎に照らされて、輝いていた。この巨体であれほどの速さを体現したことに畏怖した。
“お褒めにあずかり光栄です。まあ、消滅士様こそ、よく耐えて下さいました”

俺からは何も言っていない。この思考へ、敵群に追われる直前と同じことが起きている。

“ですが……消滅士様がいらっしやらなければ、もっと速く動けました”

“僕が、そんなに重かったんですか？”

俺は、決して体の大きな方ではない。それでも一六歳にはなっているし、体重もそれなりだ。そのせいかと思ったのだが、違った。

“いえ、あなた様を振り落とすわけには参りませんから”彼女は少し笑った。“ご自分の体重を気になさる前に、わたくしの気持ちも考えてほしいものです。重たいと思われて喜ぶ女はおりません。

ところで……さきほどと御言葉遣いが変わられたのは何故でございましょうか？”

少しばかり、寂しそうではある。

ガラスの中で薪が崩れ、炎が陰った。俺は、慌てて蓋を開け、薪をくべる。

返答に困った。親しくもない者には、やはり、敬語を使わなければやりにくい。しかし、落ち着きを取り戻した俺の言葉が急に他人行儀になったのが、この狼の気に入らなかったらしい。

“わたくしを信用しても良いとお思いになられましたら、いつでも本来のお言葉をお使いなさいませ”

頭を垂れた、懇願だった。

毛皮が夕日色に揺れている。

少し前に殺しあったことが気にならない、あたたかい色。

——信じる。

沁みとおる感情は、そうだ。

今 俺が人でないものと話してられるのは、お互いの心が双方向的につながっているからなのだろう。つまり、この一人と一匹の間には見えない電話線があって——それがどのようにして生まれたのかはわからないが——お互いが強く念じたことだけが相手に届く……。

俺は、レイの瞳をまっすぐに見つめていた。既に、思いを言葉にして念じる必要はない。この短期間に俺とこの狼は、それだけの感情をつくり上げた。現実世界では考えられないけれど、確かに、俺とレイは互いに互いを頼みにするようになっていた。

……振り返ってみれば、こんな感じ方・考え方ができるようになったのは、俺の中で新たな力が目覚めつつあるという何よりの証拠だったのだ。

「他者との心の共有」

それが、この世界を救うための力なのだと俺が知るのはもう少し先のことだった。

>第五話 了く

第六話く狼く（前書き）

本小説は弊社サイト「相沢印刷所」にて連載中のものを書き直して投稿しているものです。弊社サイト版は修正せずに残しておこうかと考えております。

なお、最新話は上記弊社サイトにて連載中です。
コンスタントに投稿するつもりではおりますが、よろしく願いいたします。

相沢たかし

第六話　狼

平原。

二頭の馬が疾走していた。

乗り手はどちらも女。一人は二十代の後半、もう一人は十八、九に見える。

年長の方は、鞍の前部にサッカーボール大の透き通った球体をくくり付けていた。時折それを見つめ　もう一人に指示し、細かく進路を修正する。艶めいた黒い髪が腰の辺りまであって、風になびいていた。

少女の馬には弓があった。

洋弓で、弦は外されており、今はしなっていない。真ん中にある握りは露出しているが、その上下には鞘のようなカヴァが着けられ黒光りしていた。左腰には鉄製と思われる矢筒があった。

年長者からの指示のたびに少女は軽く頷き、的確に手綱を捌いてゆく。深い青の髪が、馬の挙動をなぞって後方に流れた。

併走する二頭は汗を滴らせた。

黒髪の女はカッサンドラ、青い長髪の少女はシーラという。預言者とそれを守護する巫女。

消滅士召喚が知れてすぐに、彼女らは聖都フェンネルを出発した。それ以来、ここまでぶっ通しで走り続けている。

それでも、休むわけにはいかない。

神の寵児たる消滅士を失えば、未来はない。

遠く、関所が見えた。

馬を換え、再び目的地へ――。

ばしっ！

鞭を打つ音が平原に響き渡った。

第六話（狼）

“まずは、救いに感謝を”

彼女は丁寧な頭を下げた。

“わたしは、狼族・諜報部「影」の長、レイにございます。”

我ら狼は、先代消滅士様の御代、かの方にお仕え申し上げておりました。先代様が世を去られた後、永らく主を持たなかった我々ではございますが、定まった主人が御召喚されましたからには……”

彼女は平伏した。“この身、なんなりと御使い下さいませ”
軽くめまいがした。いまだかつて、ここまで敬われたことはない。
うす暗く揺れる光源と、伏せた狼と。

ひやりと背中に感じながら、火の暖かさを覚えている。

周りは非日常だ。先刻は殺されかけ、直後、記憶に呪われた。

自分はなぜ、ここにいるのか？

ここはなんなのか？

元の世界に帰ることは、できるのか？

いや、

そもそも俺は、帰りたいのか？

なんでもいい、彼女の知るところの、全てを！

“説明し申し上げることに異存はございません”

ぼやけた知覚を遮るように、彼女が言った。読まれていた。

“消滅士様がお望みなら、「知るところの全てを」、申し上げますよう”

ことごとくこの狼は自信に満ちているように思える。彼女と俺は相変わらず向かい合っていた。しかし、それは姿勢だけのことで、自分の視界はどこか離れたところへ流れているような気がした。

梅雨時に濡れる自動車の中から、走り去る景色を、人たちを眺め

ているとき、すべてが滲む。

速すぎる、なにかもが。

彼女は、やはり、こちらを見たまま言葉が続けたが、俺にはそれが、あまりに遠いものに感じられていた。

どこまでが現実で、どこからが幻なのか。生きてきた中で、自分は、知らず気が狂っていただろうか。

“ですが、残念ながら今の「影」は……”

俺は彼女を見ているだけだった。

レイは目を逸らした。

“「影」は、どうしたんだ？”

言葉尻に気をつけた。彼女は、俺の丁寧な話し方を嫌っている。

“「影」は……、半壊しました” 瞬きを、一度。“消滅士様と同じ、人族によって”

それが、俺を襲った理由。彼女が魔獣に堕ちた全て。

感情はなにも俺から彼女へだけ、というわけではない。レイが語るその前に、薄々と背景が知れた。

レイは静かだった。それが努めたものなのかどうかもわからないくらい、感情を隠した。

“順を追って説明いたしましょう。先代消滅士様は、伝説化された、この世界の英雄でございます。その方は……”

淡々と、彼女は物語を続けようとする。

遮った。

“敬称を略してくれないか？”

俺のことを「消滅士様」と呼ぶ彼女に、俺は自分の名を教えた。

呼び切ってもらいたかった。

“しかし、それでは！”

案の定、彼女は反対した。レイからすれば、そうなのだろう。だが、どうあっても。なんとしても、“様” づけの呼称など。

——俺は、自分を知っているのだから。

誰が敬おうとも、俺は、片岡家の忌み子で殺人者の片岡真。まっ

たく別の世界に來たからといって何が変わるわけでもない。この俺が誰かの上に立つことなんて、あつてはならない。許されることではないし、許さない。

レイは不服そうに口もとを歪めて、話を続けた。彼女には申し訳ないけれど、こればかりは仕方がないと思える。抜けることのない性根が俺に巢食ってしまったている。

”かつて先代の消滅士様はこの世界の暗雲を祓ったのでございます”
丁寧語は、消えないらしい。彼女なりの妥協だろう。

”暗雲？”

”そうです。「世界の歪み」と呼ばれる存在――。

シンもご存知のように、生きとし生けるものは皆 その深さこそ違えど心に闇を抱えております。「歪み」はそこにとり憑いてその生き物を変容させる……ありていに言えば、見境なく自身の欲望を満たそうとするのです。ちょうど先ほど、わたくしがそうだったように。

闇が深ければ深いほど変容は大きい。わたくしはこの姿を保っておりますでしたが、場合によっては……”

レイの表情が険しい。それは歪みに憑かれた自分への純粋な嫌悪だった。

”お前にそんなに深い欲望が？”

とても信じられなかった。今 認識する心は忠義の塊だった。

”わたくしの場合――復讐です”
息を、呑む。

レイは再び俺から目を逸らした。

”約200年前、我々狼は先代消滅士様の戦いに協力しました。そのときの我々は、まだ、歪みにとり憑かれる程の巨大な闇を抱えておりませんでしたから、実際の戦場はもちろん諜報活動等でも強力な部隊でございました。

やがて戦いは終結し、再び平和が訪れました。

人間・狼・その他の種族たちは互いの功績を称え、永遠の共存、

繁栄を約しそれぞれの地へと去ったのです”

微か、レイはためらった。彼女は天井を見上げ、俺を見据えて話し始める。

”そして50数年前、人間たちが突如我々の国に進軍してきたのです。

我々は甘かった――戦いが終わったときの約束を馬鹿正直に信じ、以後 他の種族に対して諜報を行わなかった……”

嫌な音がした。無意識のレイの歯ぎしりが大気を震わしている。全身に無駄なくついた彼女の肉が隆起し、やり場のない力を持て余した。レイは固く目をつむり 間をおいて話を続けた。

”外交のため、と称された会談の場で我々の族長は捕えられました。人族は会談にあわせて進軍してきていたのです。その結果、狼一族に強制的な武装解除要求がつけつけられました”

レイがまたためらう。彼女の体は震えていたが、先ほどとは外観が異なっていて様子がおかしい。何度か、彼女は荒い息をした。

”申し訳ございません、うまく、言葉にできない――。ここから先はわたくしの記憶を映像としてご覧ください。これだけ思考を共有できていれば、恐らくは。目を閉じて……”

視界を、無に。

先刻まで話の背景にうつすらと浮かんでいたレイの心が、たった今はくつきりとあぶり出された。

悲しみ、悔しさ、怒り。

感情の奔流は彼女の思考を押し流し、魂をずたずたにしていた。

その痛みを感じ、ひび割れた自分の心が、そして何より、それを克服できない自分自身が、俺にはひどくちっぽけなものに思えていた。

>第六話了<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3052i/>

消滅士

2010年10月28日05時43分発行